

## 「けど」で言い終わる発話の語用論的研究

—場面における言いさしの「けど」を中心に—

曹英南

(1998年6月27日発表)

### 1. 始めに

日本語の話し言葉の特徴の一つとして「ケド」「カラ」「ノデ」「テ」「シ」などで終わる発話があり、それは日本語学習者にとって、習得が難しい<sup>註1</sup>とされている。しかもその研究は近年なされたばかりであり、まとまった形で「けど」で言い終わる発話を研究しているものは数編<sup>註2</sup>に限られている。

そこで曹(1997)では実際の生のデータにおいて、言いさしの「けど」<sup>註3</sup>で言い終わる発話が使われている状況及びその談話機能を明らかにした。それに引き続き、本研究では言いさしの「けど」の談話機能がどのような場面において現われやすいか、使用頻度という観点からその傾向を明らかにすることを目的とする。

### 2. 調査の概要

#### 2.1 分析資料

自然の生のデータであり、多様な場面と対人関係が提示されている、現代日本語研究会の「自然談話録音資料」(以下、談話資料と称する)を使用する。

#### 2.2 研究の範囲

##### 2.2.1 「けど」で言い終わる発話の定義

本研究では話者の「けど」で言い終わる発話の後、聞き手が実質的な発話をし、話者が交替した場合、その「けど」で言い終わる発話を分析対象にする。

##### 2.2.2 言いさしの「けど」で言い終わる発話の定義

「けど」が何らかの暗示を表わし、聞き手(相手)が話の前後関係から暗示の部分をもって考えなければならないものである。

例1)H: もう行くだけでもねー、10数時間★だよ。

S: →まあ、←たしかに、大西洋を一、(うん Inf(女))越えてみたいって★ゆうのはあるんだよ、一度。

H: →うん、うん、うん。←

<sup>註1</sup> 山本(1989) 柏崎(1993)

<sup>註2</sup> 佐藤(1993) 三原(1995) 白川(1996)

<sup>註3</sup> 「けれども」「けども」「けどね」「が」を代表させ、「けど」と称する。

H: まあね。

S: ①それはやってみたいと思ってるんだけどー。

H: ②そう、世界一周ってのもやってみたい★けどね。 (笑い)

S: →そう、でもね、←でもねー、そこまで、してさあ、(笑い)(うーん Inf(女))  
やりたいとは思わない。

Sが一週間でロンドンとニューヨーク両方行って来た友達の話の切り出した場面である。Sの①の発話内容は大西洋を超えてみたいという発話内容だけではなく、友達の行動は賛成できないというような暗示が含まれている。これはSの最後の発話「・・・そこまで、してさあ、やりたいとは思わない」から裏付けられる。Hの②発話も同様である。

## 2.3 分析方法

曹 (1997) では言いさし「けど」で言い終わる発話の談話機能を明らかにした。本研究ではその談話機能がどのような場面において現われやすいか、その傾向を明らかにすることが目的であるため、まず談話機能について述べる。

### (1) 非実現を表わす場合

a. 話者の考えまたは意図が実現しないことを表わす場合。

例2) H: ずいぶん安かったですね。

S: うーん。

H: ①1本が千円ぐらいするかと思ったけど。

S: ②うーん、定型外で送れたんですけど。

H: あっ、軽いのかな↑

SがHのビデオを郵送してきたことを話す場面である。Hの①は郵送料が1本千円するかと思ったが、実際はそうならなかったというHの考えが実現しなかったことを表わしている。Sの②も定型外郵便はお金がかかるはずだと思ったが、実際にはあまりかからなかったというSの考えも実現しなかったことを表わしている。これはHの「ずいぶん安かったですね」という発話から裏付けられる。

### (2) 不納得を表わす場合

a. 話者にとって好ましくない状況を表わす場合。

b. 現実の好ましくない状態を意識し、好ましい状況になるように願う気持ちを表す場合。

c. 話者の意志が実現されない妨げの状況があることを表わす場合。

例3) H: どう↑、おいしい↑

H: いまいち↑

S: おいしいけど。

H: なに。

S: え↑

H: 正直なところ。

S: 正直なところ↑

H: うん。

S: うーん、わかんないなあ。

食事をする場面である。Sの「おいしいけど」という発話は素直に「おいしい」と言えない好ましくない何らかの状況があることが暗示されている。これはHの「正直なところ」という情報要求の発話と後のSの「うーん、わかんないなあ」という発話から裏付けられる。

### (3) 相手に対する働きかけを表わす場合

- a. 聞き手に何らかの行為を行うよう求める、または勧める場合
- b. 聞き手に許可を得るための要請をする場合
- c. 聞き手に情報を求める場合。

例4) S: すいません、★印刷したいんですけども。

H: →はい。→

H: はい。

H: やりかたわかりますか↑

SがHに依頼をする場面である。Sの発話内容は「印刷したいんですけども、よろしいですか」というような要請をしている場合で、Hは「はい」という発話によって許可をする。

言語表現は場面、対人関係など様々な要素が絡み合い、表現されている。「けど」で言い終わる発話は「丁寧体の婉曲表現<sup>244</sup>」である、などのネーミングからも、待遇性の要素があるように思われる。しかし「けど」で言い終わる発話の全てが、待遇性をもっているわけではない。例えば、非実現を表わす「けど」で言い終わる発話は、「けど」の直前の発話が実現されないことを表わすためのものであるため、少なくとも、丁寧体の婉曲表現とは言えないのではないかと思われる。

そこで「けど」で言い終わる発話がどのような場面に使われているのか、談話資料における使用頻度という観点から、三つの談話機能別に、その傾向を明らかにする。

## 3. 場面から見た言いさしの「けど」で言い終わる発話

談話資料においては様々な場面が提示されているが、それらをフォーマルな場面とインフォーマルな場面に二分する。フォーマルな場面は大会議、仕事の話、打合わせ、小会議、院生の指導、相談の場面であり、インフォーマルな場面は休憩時雑談、昼食時雑談、雑談、始業前雑談の場面である。2.3で考察した「けど」で言い終わる発話の機能が、フォーマルな場面とインフォーマルな場面において、どのような割合で現われているか、以下表に示す。

<sup>244</sup> 山本 (1989) 参照。

場面 談話機能	フォーマルな場面		インフォーマルな場面		合計
	頻度	総発話数に対する割合	頻度	総発話数に対する割合	
非実現を表わす場合	7	0.16%	7	0.10%	14
不納得を表わす場合*	5	0.12%	18	0.27%	23
相手に対する働きかけを表わす場合*	13	0.31%	4	0.06%	17

▲【%】はフォーマルな場面の総発話数4138発話とインフォーマルな場面の総発話数6547発話に対する「けど」で言い終わる発話の割合である。

▲【頻度】は談話資料に現われた「けど」で言い終わる発話の数である。

▲【\*】はカイ2乗検定において0.05%水準の有意差が認められた機能である。

上記の表から次のことが分かる。「非実現を表わす」場合はフォーマルな場面とインフォーマルな場面との間で顕著な差はない。「不納得を表わす」場合はフォーマルな場面よりインフォーマルな場面で多く使用されている。「相手に対する働きかけを表わす」場合はインフォーマルな場面よりフォーマルな場面で多く使用されている。談話資料という限られたデータの範囲であり、断定は難しいが、少なくともここで言えることは、「相手に対する働きかけを表わす」場合、「不納得を表わす」場合は場面に応じて使い分けていることである。また「非実現を表わす」場合は場面に応じて使い分けがないように考えられる。

#### 4. 終わりに

今回の分析では非実現を表す場合は場面に応じて使い分けがないが、不納得を表す場合はインフォーマルな場面で、相手に対する働きかけを表す場合はフォーマルな場面で使われているという結果が出た。今後の課題としては「けど」のバリエーションである「けれども」「けども」「けどね」「が」などがどのような条件で出現するか、その傾向をみることである。

#### 参考文献

- 山本富美子 (1989) 「待遇表現としての文体」『日本語教育』69号
- 柏崎秀子 (1993) 「話しかけ行動の談話分析－依頼要求表現の実際を中心に－」『日本語教育』79号
- 佐藤勢紀子 (1993) 「言いさし『が/けど』の機能－ビデオ教材の分析を通じて－」『東北大学留学生センター』
- 三原嘉子 (1995) 「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第2号
- 白川博之 (1996) 「『ケド』で言い終わる文」『広島大学日本語学科紀要』第6号
- 現代日本語研究会 (1997) 『女性のことば・職場編』ひつじ書房
- 曹英南 (1997) 「『けど』で言い終わる発話について」The Third International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies The Chinese University of Hong Kong, Hong Kong